
月の残像

影夜叉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の残像

【Nコード】

N6766R

【作者名】

影夜叉

【あらすじ】

ある夜、突然姿を消した銀時。

その翌日、木刀と謎の手紙が見つかる。

新八と神楽が、銀時と再会した時、思いもよらぬ言葉を掛けられる。

第0話 追憶

忘れかけているけど、忘れられないこと。

親も家も無い俺に、初めて出来た家族。

年は少し離れていて、髪も瞳の色も、俺とは正反対な奴だったけど、一緒にいてくれた。

嬉しいことや楽しいことより、苦しいことやつらいことの方が多かった。

けど、2人でいたから、乗り越えられた。2人でいたから、耐えられた。

……なのに、俺達は離れ離れになった。いや、なつたじゃない。させられた。

ずっと一緒にいたかったのに。離れたくなかったのに……。

あれから、長い月日が経った。

一緒にいた記憶は、殆ど消えている。でも、顔は今でも覚えている。会えば、すぐに分かる筈だ。

だから……。

もう一度会いたい。

第1話 失踪（前書き）

この小説は、BLEACHの映画『Fade to Black
君の名を呼ぶ』を参考に書きました。

その為、似た所が多々あると思います。
ご了承下さい。

第1話 失踪

新八が帰宅し、神楽が眠った深夜。

銀時は、物音を立てないようにして、万事屋を出た。

「ちょっと隠れてるな…」

見上げた空には、満月が出ているが、今は雲で隠れてしまっている。
手にした書簡を広げ、目で読む。

『ぎんときへ』

きょうのよる2じ、じんじゃでずっとまっています』

ひらがなで書かれていた書簡は、子供が書いたような字だった。
悪戯かと思ったが、何故か気になり、その場に向かっている。

(あの手紙……)

考えながら、神社に向かった。

(どこにいる?)

指定された神社に着き、銀時は辺りを見回す。

時間帯もあってか、人気は全く無く、街灯があまりないこともあり、
視界が悪い。

「…まさか、本当にただの悪戯だったりしてな」

畳んだ書簡を見て、呟いた時。

「来てくれたんだ」

男の声が聞こえ、素早く木刀を握り、振り返る。
が、誰もいない。

「誰だ！」

木刀を握る手に、自然と力が入る。
警戒しながら、周囲を見る。

「やっぱり…。俺のこと、忘れちゃった？」

声が間近で聞こえ、ゆっくりと後ろを向く。
そこには、1人の男が立っていた。
暗い為、顔が見えない。

「久しぶり。って言っても、分かる訳ないか」

雲の合間から月光が漏れ、男の顔が少し見えた。

「おまえ……！」

呟くように言った銀時の口に、男は薬品を染み込ませた布を当てた。

「！？や、止め…ろ…」

目を閉じ、脱力した銀時を受け止める。

銀時の手から、木刀と書簡が滑り落ちる。
書簡は、風で飛ばされていった。

「…江戸はやっぱり、落ち着かないな」

男は銀時を背負い、街を見下ろす。

「早く行こう。静かな所に」

肩越しに振り返り、男は言った。

口元は微笑んでおり、前を向くと、その場を後にした。

背負われた銀時は、僅かに顔を上げる。

ぼんやりと開けた目は、光が無く、焦点も定まっていない。

「……………」

銀時の記憶が、色を失い、次々に消えていく。

殆どの記憶が消えたのと同時に、目を閉じ、意識を失った。

第2話 痕跡（前書き）

神氷空、鋼魂に登場する刹那がいます。

但し、設定は前章の二作品と違い、最初から人間になっており、攘夷志士になっています。

第2話 痕跡

翌朝、新八は万事屋にやって来る。

「おはようございませう」

返事が無いのも、いつものことだ。

銀時と神楽が、早く起きていることはまず無い。

「起こすかな」

先に押し入れを開け、神楽を起こす。

「神楽ちゃん、朝だよ」

「うーん、あと5時間……」

「だーめ！5時間って、どんだけ寝る気だー!!」

怒鳴りながら神楽を起こし、銀時を起こそうと、部屋を出る。

「あれ？」

部屋の襖が開いており、銀時の姿は無い。

「銀さん？」

「新八〜どうしたネ」

目をこすりながら、神楽が来る。

「銀さんがいないんだ。どこに行っただか、聞いてない？」

「うっん」

首を振って答える。

と、玄関を開ける音が聞こえた。

「銀ちゃ……」

「あ、新八くん、神楽ちゃん」

そこにいたのは、煉獄姫れんごくひめの異名を持つ、及川刹那おいかわせつなだった。

「及川さん！」

「銀時さんいる？」

「いませんけど……」

すると、刹那は険しい表情をした。

「やっぱり……」

「やっぱりって、何があったんですか!？」

「ちょっと長くなるから、上がっていい？」

「あ…、どうぞ」

何かを手にした刹那は、万事屋の中に入る。

「それで、何があつたんですか？」

「これを見て」

ソファに座った刹那は、持っていた物の布を取った。出てきたのは、銀時の木刀だった。

「それ、銀ちゃんの…！」

「今朝、神社の近くの草村で見つけたの」

「草村で…？」

刹那は頷き、懐からしわくちやになった紙を出した。

「あと、これ…。水溜まりに落ちてて、所々読めないけど……」

『ぎん…へ』

……よるるじ、……まっています』

広げた紙は、銀時が持っていた書簡だった。

刹那が言った通り、所々読めなくなっている。

「この、ぎんって銀ちゃんのことアルか？」

「そうだと思う」

「よる2じ…。夜中の2時に、銀さんはどこかに呼び出されて、それから…」

そこから先に、言葉が出てこなかった。

呼び出され、出て行った銀時は、どこに行っただのか。

「銀ちゃん…まさか」

「大丈夫だよ、神楽ちゃん」

神楽の言葉を遮り、新八が言った。

「銀さんが、そう簡単にやられたりはしない。きっと無事だよ」

「新八…」

「帰ってこないのは、何か訳があるんだよ。きっと…」

自分に言い聞かせるように、新八は言う。

「そう…アルナ。銀ちゃんが、簡単にやられたりする筈ないネ」

呟くように言う神楽を見て、刹那は立ち上がる。

「一応、銀時さんを捜してみるね。このことは、小太郎さん達にも言うておくから」

「僕達も、捜します！もう少し待って、銀さんが帰ってこなかったら…」

刹那は微笑むと、頷いて言った。

「探す時は、気を付けてね」

新八と神楽は、玄関まで刹那を見送る。

「何か分かったら、連絡するから」

「分かりました」

「頼むアル。バナラ……」

2人を一瞥し、刹那は万事屋を後にした。

第2話 痕跡（後書き）

ポケモンになってないのに、神楽は刹那をバナラと呼んでいます……。

第3話 覚醒

布団に寝かせられていた銀時が目を覚ましたのは、見覚えの無い部屋だった。

「……どこだ？ここ……」

起き上がって部屋を見回した後、自身の身体を見る。服装が、白い着流しになっている。

「よっ…と」

服装を気にせず、壁に手をつけて立ち上がる。開け放たれた窓から、外を見た。

「どこだ……？」

外を見て、強い西日に目を細め、景色を見る。見えたのは、山と少し遠くにある海だった。

ガタッ

物音に振り返ると、紺色の着流しを着た、銀時と同じ位の身長の黒い短髪の男が立っていた。

「銀時っ！」

男は嬉しそうに、銀時に駆け寄る。

「おい！誰だ、てめエ！？」

少し後ずさる銀時を見て、男は立ち止まる。

「銀時…、俺だよ。俺の顔、よく見て」

「びゃ…く、や。白哉^{ひゃくや}…か？おまえ」

白哉と呼ばれた男は、頷いた。

「良かった…。俺のこと、分かって」

「分かってって、どうゆう…」

聞き返そうとした時、ひどい頭痛がし、頭を押さえ、銀時はうずくまる。

「銀時！大丈夫か！？」

「……ああ」

「もう少し、寝てた方がいい…」

「そうだな……」

弱々しく頷き、白哉に支えられ、横になる。

「何か食べるか？持ってくるけど」

「いや、今はいい」

横になりながら、白哉の顔を見る。

「あの時と逆だな……」

あの時、とゆう言葉を聞き、白哉は小さく笑った。

「そうだな」

「……あの時は、俺がおまえの面倒みて……」

そこまで話すと、銀時は目を閉じ、眠った。

第3話 覚醒（後書き）

白哉の名前の由来……朽木白哉です。BLEACHの。

他に名前が、思いつかなかったの。

第4話 過去

とても幼い頃、銀時は1人、道を歩いていた。

銀時には、物心が付いた頃から家も親も無い孤児だった。

「あ………」

道の先に、自分より少し年下位の少年がいた。

少年は、うつ伏せで倒れている。

近くに行き、少年を見下ろす。

「死んでんの？」

しゃがみ込み、呟いた。

何か持っていないかと思い、少年に触れた。

「ん………？」

触った瞬間に、少年は虚ろな目を開けた。

銀時は咄嗟に、手を引っ込めた。

（死んでなかったのか…）

軽く舌打ちする銀時を、少年は起き上がり、虚ろな目でじっと見る。

銀時と違い、黒い髪に群青色の瞳と反対な色をしている。

「何だよ。人の顔ジロジロ見て」

ムツとしながら訊くと、少年の腹が鳴った。

「腹減ってんのか？」

少年は、無言で頷いた。

どうやら、少年は行き倒れていたようだ。

「しょうがねエ。これ、ちょっとだけやるよ」

銀時は、先程死体から漁ったおにぎりを少し割り、少年にあげた。少年はおにぎりを受け取ると、夢中になって食べ始める。余程食べていなかったらしい。

「じゃあな」

軽く手を振り、銀時は歩き出す。

それを見た少年は、銀時の後を追う。

「なんで付いて来るんだよ！付いて来ても、食う物はねーぞー！」

「一緒に…いいいい？」

「あ？」

声を荒げると、初めて少年は口を開けた。

しかも、一緒にいてもいいかと訊いてきた。

「な、なんで、初めて会った見ず知らずな奴と、一緒にいなくちゃなんねーんだよー！」

それも理由だが、誰かがいると、食べ物分け前が減る。そっちの方が本音だった。

「あ……。名前、まだ言ってなかったね」

見ず知らずの奴と言われたからか、少年は名を名乗った。

「俺は、白哉。月原つきはら白哉ひらくってゆうんだ」

(勝手に、何名乗ってんだ)

銀時は白哉を無視して、歩き続ける。

「あ、待ってよ!」

走り出した白哉は、突然倒れた。

「お、おい!どうした!?!」

倒れた白哉を見て、銀時は思わず駆け寄った。

白哉は、ぐったりと目を閉じている。

「……………しょうがねエ」

銀時は呟き、自分より少し小さい白哉を背負い、近くを流れる川に向かった。

「う……………」

白哉は、河原で目を覚ました。

「気が付いたか？」

横から、銀時が顔を出した。

「いきなり倒れたから、びっくりしたぞ」

そう言いながら、銀時は水を入れた葉っぱを渡す。

「あ、ありがと……」

葉っぱを取り、白哉は水を飲み干した。

「水も飲んでなかったのか」

「うん。俺、家族も帰る所も無くて、ずっと歩いてたら、倒れちゃって……」

「だからって、飲まず食わずでいる馬鹿がどこにいたよ」

銀時は立ち上がり、再び歩き出す。

白哉は銀時を見送っていると、不意に銀時は立ち止まり、肩越しに振り返った。

「来るんじゃないのか？」

「いいの？」

「嫌ならいいけど」

白哉の表情は明るくなり、小走りで銀時を追った。

「そっだ、名前。名前、教えてよ！」

「坂田…銀時…」

そっばを向くようにして、銀時は名乗った。

「銀時………」

嬉しそうに銀時の名を呟き、白哉は並んで一緒に歩いた。

第5話 深夜

どれ位眠っていたのか。

銀時が目を開けると、部屋に明かりが点いている。

「あ、起きたか！」

土鍋を盆に載せた白哉が、部屋に入ってくる。

「ずっと寝てるから、そろそろ起こそうと思ってたんだ」

「白哉……」

「ん？」

「さっき、夢で……おまえと初めて会った時のこと見た」

「そうなのか？」

「ああ……」

「あ、飯食つか？ずっと食べてないだろ」

「そうする」

言いながら、銀時は起き上がる。

「ほ」

白哉は、土鍋に入ったお粥を椀によそい、手渡した。

「味、どうだ？」

銀時が食べるのを見てから、訊いた。

「うまい」

「良かった…！」

「おまえが作ったのか？」

「うん！うまく出来たか、自信なかったけど」

笑って答える白哉を見ながら、銀時はお粥を食べる。

(あの白哉が、まともに料理が出来るようになるとはな)

「……………白哉、ちょっといいか？」

食べ終わった椀を置き、白哉から視線を外す。

「何？」

「俺さ、おまえのこと…ガキの頃のことしか覚えてないんだけど…」

…

白哉の表情が曇る。

銀時は、構わずに続ける。

「最初に言ってたよな。『俺のこと分かって』って。それ…どうゆう意味なんだ!?!」

身を乗り出し、白哉を問い詰めると、再び激しい頭痛に襲われた。

「うっ…あ…!?!」

頭を抱える銀時の脳裏に、細切れになった記憶が浮かぶ。だが、その記憶を繋げることが出来ない。

「銀時…っ!」

「白哉…、何があつた?俺、今まで何してたんだ…?」

頭を押さえながら、俯く白哉を見る。

すると、白哉の口が微かに動く。

「眠ってたんだ…」

「眠って…?」

「何かに襲われて、ずっと眠ってたんだ。そのせいで、記憶の殆どが消えちゃったみたいだけど…」

「記憶が…消えてんのか…?俺は」

白哉は頷くと、顔を上げ、銀時の手を握る。

「でも、心配しないで。俺は、銀時とずっと一緒にいるから!…記

憶も、きつと戻るよ」

「…そうだな」

戸惑いながらも、銀時は静かに呟いた。

第5話 深夜（後書き）

次から、更新が遅れるかもしれません。

でも頑張ります。

第6話 願望（前書き）

白哉の目線です。

目的も、幾つか明らかになります。

第6話 願望

時間は少し遡り、銀時が目を覚ます1時間程前……。白哉は、屋根の上で月を眺めていた。

「これで、また一緒だ……」

同じことを、先程から何度も呟く。

「俺のことも分かったみたいで、成功…かな？」

懐から、空になった瓶を取り出す。

（今の記憶を消し、昔の記憶を呼び起こす…。強力な薬を2つも使ったから、副作用も激しいな）

屋根の上から、すぐ下の部屋で眠っている銀時を見ようとすが、よく見えない。

「まだ寝てるか…」

周りには、風の音しか聞こえない。再び、月を眺める。

（次に目を覚ましたら、また、記憶の混乱からくる頭痛が何度か起こる。手も打たないと）

「消した今の記憶は、もう戻らない。でも、あの時のことも忘れて

るかな……」

銀時を襲い、薬を吸わせ、記憶を消した。
同時に、自分についての記憶を呼び起こした。
だが、不安なことが一つあった。

「あの時のことは、あれだけは、絶対に思い出させない！それだけを気をつければ、銀時は俺とずっと一緒にいてくれる……！」

手を強く握り、白哉は立ち上がる。

「そろそろ、銀時を起こすか。飯も用意して、と」

眩きながら、中に入る。

『銀時と一緒にいたい』

それは、白哉がずっと抱いていた願い。
だから、もう離れたくなかった。

第7話 行方

翌朝、新八と神楽は、万事屋を出た。

昨日は1日、銀時の帰りを待ったが、いつまで経っても、銀時は帰って来なかった。

「昨日は結局、銀ちゃん帰って来なかったネ…」

「うん。1日経っちゃったけど、早く捜しに行こう！」

「そうアルナ」

2人は、定春を連れて、木刀と書簡が落ちていた神社の近くに向かった。

「この手紙…。何が書いてあったかは、よく分からないけど、銀さんの知ってる人から来たのかな？」

新八は、所々読めなくなった書簡を見る。

「でもそれ、差出人の名前とか、どこにも書いてないネ。何で銀ちゃん、そこに行ったんだろ…」

「確かに…。字は、ひらがなばかりで、子供が書いたみたいだ」

「わん」

神社の近くに行くと、定春が吠えた。

「どうしたアルか？定春」

「あ！桂さん…」

神社の境内に、桂の姿があった。

「ん？新八くん、リーダー」

「何してるアルか？」

「昨日、刹那から聞いた。銀時がいなくなったらしいな」

「はい…」

新八は頷き、書簡を取り出した。

「あの、桂さん。この手紙、誰からか分かりませんか？名前が書いてなかったんですけど…」

「どれ…」

桂は書簡を受け取り、字を見た。

「…すまん。誰が書いたものか分からん」

「そう、ですか…」

「手紙の内容がどうあれ、あいつがそう簡単にやられはせん。おまえ達も、分かっているだろう？」

書簡を返し、桂は静かに笑った。

「銀時がいなくなつて、まだ1日だ。俺も、一緒に捜そう」

「いいアルか？」

「ああ」

「でも、桂さん」

「桂アアアツ!!!」

新八が言いかけた時、土方と沖田が叫びながら走って来るのが見えた。

「む、真選組!?!?すまない、新八くん、リーダー!先に捜していてくれ!!!」

それだけを言うと、桂は逃げて行き、境内には新八と神楽、定春が残された。

第7話 行方（後書き）

2つの小説を両立させるのは、大変だ…。
複数の小説を、更新出来る人って凄いなあ。

第8話 浜辺

長時間眠っていたこともあってか、銀時は夜明け頃に目を覚ました。横を見ると、白哉が寝ており、眠っている姿をぼんやりと眺める。

「……………」

目を覚ます少し前、何かの夢を見ていた気がする。どんな夢だったかを思い出そうとした時、軽い頭痛が起こる。

「つつ……………」

頭を押さえて起き上がると、窓辺に行き、外を見た。

「……………銀時？」

振り返ると、白哉が布団から上体を起こしている。

「悪い、起こしちまったか？」

「いや。…どうかした？」

「おまえのそばにいるのが……………、すげー久しぶりに感じてな」

視線を外に戻し、呟いた。

「心許ないな。記憶が無いってのは……………」

「銀時…」

自嘲気味に言う銀時を、白哉は見つめた。

「ちよつと、散歩しに行かないか？」

「散歩？」

「うん。気分転換にさ」

笑って言う白哉に、銀時は少し笑い「そうだな」と答えた。

2人は外に出ると、海に向かって歩いた。

海に近付くにつれて、潮の匂いがしてくる。

「ついたよ」

海岸につき、白哉は足を止めた。

朝日を受けた海は、眩しく輝いていた。

「朝なのに、随分眩しいな」

朝日に目を細め、銀時は砂浜に座る。

白哉も隣に座った。

「白哉…」

「ん？」

「おまえ、俺とずっと一緒だったのか？」

白哉は、一瞬、答えに詰まったが、黙って頷いた。

「俺は、何かに襲われたって言うてたよな？何かってなんだ？」

「…知らない」

俯いた白哉の肩に手を置き、銀時は縋るように訊いた。

「何か知ってたら、教えるよ…！」

「本当に知らないんだ！俺が来たら、銀時が倒れてて…」

「…そうか」

銀時は、白哉から手を離すと、立ち上がる。

「悪かったな。無理に訊いて」

白哉も立ち上がり、銀時をじっと見る。

「そろそろ戻らねーか？腹減ってきた」

「…分かった。帰ったら、すぐに用意する」

2人は海岸を後にする。

海が遠ざかっていくなか、銀時は歩きながら、後ろを見た。

すると、一隻の船が見え、甲板に煙管を持った左目に包帯をした男がいた。

「どうした？」

立ち止まった銀時を、不思議そうに見る。

「いや、何でもねエ」

そう答えると、何事もなかったように歩き出した。
一度も振り返らずに。

第8話 浜辺（後書き）

鋼魂の話が思い付かず、先にこつちから投稿。
ネタが思い付かない……。

第9話 目撃（前書き）

キーワードに、非原作沿いとあるように、この小説内では、銀時達と高杉は敵対していません。

第9話 目撃

「銀時を見た!？」

「ああ」

「どこで見たの？晋助さん」

桂と刹那は、昨日、銀時を見たが高杉から聞き、集まっていた。

「江戸から少し離れた所だ。遠目だったが、多分あいつだ」

「江戸から少し離れた所か……」

「どうして、そんな所に？」

言い合う桂と刹那を見ながら、何かを考えるように、高杉は煙管を吸う。

「…どうしたの？」

「…あいつの様子が、何かおかしかった」

「おかしかった？」

「銀時は、一度俺を見た。だが、もう一度見ようとはしなかった」

昨日の朝、船から銀時の姿が見えた。

見つめていると、一度振り返り、自分のことを見た。が、すぐに何事もなかったかのように、行ってしまった。

「高杉に気付かなかったんじゃないのか？」

「それが、よく見えなかったとか」

高杉は、黙って立ち上がる。

「俺が見たのは、それで全部だ」

「そうか」

「あのガキ共にも、後で言うんだろ？…早くした方がいいかもな」

「え？」

「俺の想像だが、早く捜した方がいい。銀時が危ねエ気がする」

そう言うと、高杉は去って行った。

「銀時さんが危ない…？」

「刹那、今のことは俺が伝えに行く。おまえは、高杉と一緒に銀時を捜してくれ」

不安そうに呟く刹那に、そつと言った。

「あいつも、口に出していないが、銀時を捜しに行くつもりだ」

「……うん。分かった」

桂は万事屋へ、刹那は高杉について行き、全員その場を後にした。

第10話 情報

「リーダー、新八くん。いるか？」

高杉達と別れた桂は、その足で万事屋に来た。
途中で真選組に追われ、少し遠回りをしたが……。

「桂さん！どうしたんですか？」

「何か分かったアルか？」

「昨日、高杉が銀時を見たらしい。江戸から少し離れた所で」

「本当ですか!？」

「すぐ行くネ！」

「まあ待て。それより、中に入れてくれ。さっき、真選組に追われていたんだ」

桂を中に入れ、2人は改めて桂の話を聞く。

「高杉は、遠目で銀時を見たと言っていた。が、何か様子がおかしかったらしい……」

「様子が!？」

「詳しくは言っていないかったがな」

不安げに俯く新八と神楽を、桂はじつと見る。

銀時が心配でたまらない、とゆう感情が伝わってくる。

「銀時の身に、何が起きているのかは分からん。だが、それでも行ってみるか？」

「…行きます！」

「当然ネ！」

「そうか。なら、行ってみるか！」

「はい！」

「ウン！」

新八と神楽は、力強く頷いた。

外に出た3人は、裏通りを歩いた。

理由は、桂曰わく、真選組に見つからないようにらしい。

「高杉が見た場所は、電車で数十分。そこから歩いて、数分の所だ」
地図を広げ、指でなぞっていく。

「ちょっと遠いですね」

「でも、行けない距離じゃないネ」

「そうだな。早めに行こう」

銀時が危ない気がする、と高杉が言っていた。
桂も道すがら、嫌な予感がしていた。

第11話 邂逅

「大丈夫か？」

心配そうに、白哉が顔を覗き込む。

「ああ……」

昼前に、銀時は激しい頭痛に襲われ、そのまま気を失ってしまい、夕方頃まで眠っていた。

「なんで、ここの頭痛がするんだろうな」

横になったまま、銀時は頭に手をやる。

(消えてる記憶と、何か関係があるのか……?)

そう考え、思い出そうとするが、何も思い出せない。
逆に、また頭痛が起こりそうな感じがする。

「白哉……」

呟きながら、起き上がった。

「ちょっと、散歩してきていいか？」

「え……。起きてすぐだし、止めた方が……」

「すぐ戻る。少し歩くだけだ」

外に出て行く銀時を、白哉は不安げな表情で見送った。

ややふらつく足取りで、銀時は海岸まで来た。
海を眺め、大きく息をつく。

「やっぱ、歩かない方が良かったか…？」

身体がだるく、まだ眠気がした。
その時、遠くから声が聞こえ、その方向を見る。

「銀さん！」

「銀ちゃん！」

砂浜に足を取られそうになりながら、新八と神楽が走ってくる。
その後ろには、桂がいた。

「銀時、無事だったか！」

「急にいなくなつて、こんな所で何してるネ!？」

「ほんとに、心配したんですからね」

銀時の前に立ち、3人はそれぞれ言った。

「……誰だ、おまえら」

親しげに話し掛けた3人を、銀時は警戒した様子で言う。

「え……?」

「な、何言ってるんですか、銀さん……」

「銀時……?」

思いもよらぬ言葉を掛けられ、新八と神楽は戸惑い、桂は呆然と銀時を見つめる。

「銀時っ!!」

桂達から、距離を取ろうとする銀時の前に、白哉が現れる。

「誰だ、貴様は!」

桂の問いに答えず、白哉は3人を睨み付ける。

「…下がってる」

銀時は、睨み付ける白哉を手で遮り、前に出る。

「銀時、そいつは誰だ!」

「てめーらこそ、誰だ!何で、俺の名前を知ってたんだ!」

その言葉に驚き、新八と神楽は、目を見開いた。

「銀さん……。僕達のこと…、分からないんですか……?」

「私達のこと、忘れちゃったアルか……?」

2人は、ショックのあまり、独り言のように呟いた。

「分からんと言っのか…? 銀時! この2人が、分からんと言っのか!?!」

桂は、震える声で、絞り出すように叫んだ。

その瞬間、銀時は目を見開く。

「おまえらは……。つつ……!!」

呟いたのと同時に、銀時の頭に刺すような激痛が起こった。

「銀時……!!」

駆け出そうとするより早く、白哉が銀時を受け止める。

「おまえらなんか、銀時は渡さない……!!」

3人を睨み付け、白哉は銀時を背負うと、物凄い速さで走り去って行った。

第12話 困惑（前書き）

この小説で、銀時がやたら頭痛を起こしてる描写を書いてたら、作者自身も頭痛に…！
結構しんどかった……。。

第12話 困惑

銀時と白哉が去った後、新八と神楽は座り込み、桂は立ち尽くし、ずっと黙っていた。

「ツラ！」

「新八くん、神楽ちゃん！」

声のする方を桂を見ると、高杉と刹那が走って来る。

「おまえ達……」

「おい、ガキ共はどうした？」

新八と神楽は、俯いたまま座っている。

「どうしたの？何かあった？」

「……銀時に、会った」

「本当！？」

「ああ……」

頷きながら、桂は目を逸らす。

「それで、どうした？」

「銀さん…、僕達のこと分かんなかったんです」

顔を上げ、新八が咳くように言う。
神楽も、同じく言った。

「私達を誰って言ったアル。それに、何で自分のことを知ってるのかって言うてたヨ…」

「何…それ…」

「俺が思うに、銀時は多分記憶を失っているんだろう。…自分のことが分かっているから、一部だと思っが」

呆然とする刹那に、桂が言った。

「…それで、銀時はどこ行っただ？」

辺りを見回した後、高杉が桂に訊いた。

「突然現れた、見知らぬ男に連れて行かれた」

「見知らぬ男？」

「どんな人だったの？」

「黒い髪に、紺色の着物の男だった。そいつが、関係しているのだろっ」

「誰だろうと、関係無いネ……」

座ったまま、神楽が呟いた。

「銀ちゃんが、記憶失くしてても、私達のことから分からなくても、必ず一緒に帰るネ！」

「そつだね。早く、銀さんを捜して、一緒に帰ろう」

答えるように新八が言うと、立ち上がる。
神楽も一緒に立つ。

「おまえ達だけにやらせん」

「私も捜すよ！」

「しょうがねエ、貸し作つといてやるか」

桂達がそれぞれ言った。

新八と神楽は頷き、5人で、銀時を捜すことにした。

第13話 消失

「なんなんだ、あいつらは!？」

自宅に走って帰ってきた白哉は、苛立ちながら、背負っていた銀時を下ろす。

「銀時、大丈夫か？」

座り込んでいる銀時は、視線を床に落としている。

「俺は…あいつらを知ってる……」

銀時に触れようとしていた白哉の手が、ビクッ、と止まった。

「……気がする」

付け加えられた言葉に、少し安心する。

「あのガキ共…、どこかで会った気がする……。どこでだ？」

頭に手をやり、銀時は呟く。

だが、考えても、どこで会ったか思い出せない。

(記憶が、戻ってきてるのか?)

白哉は、銀時の様子を見て思った。

消えた記憶は、もう戻らないと思っていたのに。

無言で白哉は立ち上がると、台所に向かった。

「あいつらに……、銀時は渡さない……！」

憎悪のこもった声で呟くと、棚から透明な液体の入った瓶を取り出す。

「今日1日でいい。だから、少しだけだ」

湯のみに緑茶を注ぎ、瓶の液体を少し入れた。

(この位なら、今日の記憶は消える)

白哉は、湯のみを手になると、部屋に戻った。
部屋に戻ると、銀時はぼんやりと外を見ていた。

「飲むか？お茶」

「ああ……」

受け取ったお茶を、一気に飲み干すと、強い睡魔に襲われた。

「白哉……。ちょっと、寝ていいか？」

「うん」

湯のみを足元に置くと、銀時は布団の上に倒れ込み、そのまま眠った。

(あの薬は、飲んですぐに強い眠気がして寝てしまう。目を覚ませ

ば、記憶が消える)

「これで、大丈夫だな」

白哉は静かに微笑んだ。

銀時と一緒にいられる、と小声で呟いて。

第14話 月下

頭の痛みで、銀時は目覚めた。

時刻は、草木も眠る丑三つ時……、午前2時だった。

「どんだけ寝てたんだ？俺……」

何時寝たのかを思い出す。

確か、昼前に激しい頭痛が起こり、そのまま気を失った。

「…半日以上も寝てたのか」

白哉に飲まされた薬により、昼間の出来事の記憶は消え去っていた。その為、銀時はずっと眠っていたと思っていた。

「白哉も、よく寝てるな」

隣で眠る白哉は、深夜とゆうこともありよく眠っていて、起きる気配は無い。

「ちよつどいいな……」

立ち上がり、物音を立てないようにして、銀時は外に出た。

「はぁ……」

一息つき、月を眺める。

何かを思い出せそうで、思い出せない。

「何時になったら、思い出せるんだ……」

呟くが、何も思い出せない自分が腹立たしくもある。
視線を海の方に向ける。

「ちょっと行って来るか」

「……見つけた」

同じ頃、刹那は目を閉じたまま呟いた。

銀時を捜していた5人は、近場の宿に泊まっている。

夜中に目を覚ました刹那は、波導はとうを使って銀時を捜していた。

「小太郎さん達、起こさない」と

隣の部屋に行き、桂と高杉を起こした。

「銀時を見つけたのか!？」

「うん」

「どこにいたんだ?」

「海岸に向かって歩いてた」

「海岸か……」

桂は、重く呟いた。

昼間に、銀時と会った時のことを思い返す。

「行って…みる？」

「…ああ」

「ガキ共は、どうすんだ？」

「黙ってても、ついて来るよ」

横を見ると、新八と神楽が襖から顔を出す。

「僕達も行きます！」

「もう一度、銀ちゃんに会うネ！」

「銀時さんは、あなた達のことも、分からないんでしょう？それでもいいの？」

心配そうに刹那が言うが、2人は力強く頷いた。

「分かった」

「仕方ない」

2人の様子を見て、根負けしたように刹那と桂は言った。

「早く行きましょう」

「バナラ、案内するネ！」

月光の照らす海岸に、銀時は1人、海を眺めている。

「……」

頭に手をやり、何か思い出せないか、考える。

ぼんやりと、よく分からないものを思い出しかけた時だった。

「銀時！」

突然呼ばれたが、無表情で声のした方を見る。

そこには、桂達がいた。

「銀さん……」

「銀ちゃん……」

新八と神楽は、銀時に呼び掛けるが、表情は全く変わらない。

「本当に分からないの……？」

呟く刹那を見て、銀時は僅かに目を見開き、立ち上がった。

「せ……つな……？」

無意識に言い、桂と高杉に視線を向ける。

「ツラ……、高杉……」

「おまえ、俺達のことを思い出したのか!？」

桂が驚きの声を上げると、銀時は頭を押さえて、うずくまってしま
う。

第14話 月下（後書き）

刹那は、ここでも波導が使えます。
神の力とかも使えるけど、この小説では使っていません。

第15話 憂愁

「うう……」

桂達の姿を見てすぐ、強い頭痛が銀時を襲う。

「銀時、どうした!？」

「大丈夫ですか!？」

「しっかりするネ!」

5人は驚き、銀時に駆け寄る。

砂浜に手をつき、銀時は激痛のなか、ぼんやりと浮かぶ記憶を必死で手繰り寄せる。

「うあ……あ……っ!」

突然、脱力し、頭がぐんと下がった。

「銀時……」

小さな声で、桂が咳くように言うと、銀時は顔を上げる。

「ツラ……。刹那、高杉……何で、こんなところに……?」

汗を滲ませ、荒く呼吸をしながら銀時は訊いた。

「銀時さん…！思い出したの!？」

「…少しな。あと、ぼんやりしてて…曖昧だけど」

薄く笑い、刹那を見る。

目線を動かし、新八と神楽の方を向いた。

「…おまえら…誰だ？」

「え……」

その一言に2人は凍りつく。

昼間聞いた、もう聞きたくなかった言葉を、また聞いてしまった為に。

「こいつらのこと、分かんねエのか？」

高杉が訊くと、銀時は静かに頷いた。

「誰なんだ？あと、おまえらを見るのが、すげー久しぶりに感じる

…」

記憶が、ほんの一部しか戻っていないせいで、周りのことに動揺する。

「どのくらい、思い出したんだ？」

「…俺達3人が、刹那を拾ったのと、戦争で戦ってたのと…。あと
は……」

続けようとした時、再び頭痛が起る。

「うっ…！」

「銀さん！」

「…その位だ。思い出したのは」

苦しそうに呼吸をしながら答えた。

「私達のこと…、やっぱり分かんないアルか？」

「3人で、万事屋やってきたじゃないですか…！」

「万事屋ア？なんだそれ？おまえらと、そんなことしてたのか？俺………」

話を聞いていて、白哉の言っていたことと矛盾していることに気付く。

考えようとすると、先程よりも強い頭痛に襲われた。

「ぐっ…ああ…！…！」

砂の上に倒れ込み、銀時は頭を抱えた。

「銀時！」

「銀時さん！」

「銀さん！」

「銀ちゃん！」

5人は、それぞれ銀時を呼んだ。

「思い…出せねエ…。おまえらのことも、白哉のことも…。俺自身のことも……」

うつ伏せになったまま、切れ切れに呟いた。

「おい、白哉って誰だ？」

聞き覚えの無い名に、高杉が訊いた。

「昼間いた、黒髪の男か！？」

桂が言うと、銀時は少し顔を上げる。

「昼間…？よく分かんねエけど、白哉は俺の…家族だ……」

第16話 家族

「え……？」

「銀ちゃんの…家族…？」

予想外の言葉に、5人は驚いた。

「何時から、一緒にいたんだ？」

桂が訊くと、銀時は立ち上がり、砂を払った。

「おまえらと会う前だけど、白哉と一緒にいなかったら？先生の所に行った時…」

刹那は、銀時より後に来た為分からないが、桂と高杉は銀時が1人、松陽に連れられてきたのを覚えている。

「なんで、一緒じゃなかったのか…。くそっ！分からねエ……」

頭を押さえ、銀時は呟いた。

深く考えようとすると、再び頭痛が起きそうな気がした。

「それより銀さん、帰りましょう。一緒に…」

「そうアル！記憶が無くて、一緒にいればきつと戻るネ…！」

自分を見つめる、見知らぬ2人の子供。

だが、2人が自分を慕っていたのが、なんとなく分かった。

「……………帰る気はねェ」

「……………！」

「おまえらが、俺のこと心配して、そうやってんのは分かる。けど、俺はおまえらと帰る気はねェ」

「何故だ、銀時！こいつらの気持ちを分かかっていて……………」

桂は、新八と神楽の前に立って言う。

銀時は一度、目を伏せた後、桂達を見た。

「言っただろ。白哉は、俺の家族だって。今、俺がいなくなったら、あいつは1人になっちゃう」

全員、黙って銀時の話を聞いた。

「帰る気がねェって言ったのは、そうゆう意味だ」

そう言うと、銀時は振り返り、歩き出す。

「おい、どこ行くんだ？」

高杉が訊くと、立ち止まって、肩越しに振り返った。

「白哉のどこに戻るんだよ。そろそろ戻らねーと、あいつ心配するから」

「銀ちゃん…」

「銀さん…」

「…それからのこと、頼む」

桂達に言いつと、銀時は歩いて行き、見えなくなった。

第17話 苦悩

「銀…ちゃん……」

銀時が見えなくなった後、神楽はその場に座り込んだ。

「神楽ちゃん…」

新八は神楽の肩に手を置くが、それ以上の言葉が出なかった。

（銀さんは、ただ記憶が無いだけじゃなくて、僕達の知らない人に見えた……）

自分の家族だ、と言った男の所に戻った銀時のことを思った。仮に記憶があっても、自分達を置いて行くのか？

「私…待ってるアル」

「え？」

「前と同じように、銀ちゃんが戻ってくるのを待ってるネ」

以前、銀時は事故で記憶を全て失ったことがあるが、今回は以前と違う。

「でも……、銀さんが戻ってくるって言い切れないよ」

「それでも！銀ちゃんは、必ず戻ってくるって信じてるネ！！」

神楽の目をじっと見る。

銀時のことを信じている、とゆう目だ。

「そう…だね。銀さんは、戻ってくるよね」

一瞬でも銀時は戻ってこない、と感じた自分を恥ずかしく思い、新八は神楽に笑い返した。

「ふう…」

海岸から戻った銀時は、部屋に入った。

白哉は眠っており、銀時が出て行ったことに気付いていないようだ。

「……………」

一緒に帰ろう、と言った2人の子供…… 新八と神楽のことを考えた。

全く分からないが、2人は自分を慕っていたのは確かなようだ。

(何も思い出せねエ……………。けど)

「一緒に行ったら、白哉は1人になっちまうしな……………」

呟きながら、白哉の隣に行った時だった。

「うつ……………」

また頭痛が起きた。

しかも、痛みと共に、細切れになった記憶が溢れてくる。

(なん…だ…?)

白く光る満月。

走りつづける白哉と自分。

谷底の激流。

「うぐっ！ああっ！！」

何かを、思い出せそうな気がした。

だが、同時に、思い出さずにはいけない、と叫ぶ自分がある。

「銀時！？どうした!？」

呻き声に、白哉は飛び起きて、銀時の隣に行く。

「…びゃ…くや…」

荒く呼吸をしながら、白哉を見上げる。

「俺…」

「どこにも行かないで」

突然、白哉が言った。

「え…?」

「そばにいて！俺は、銀時と離れたくないんだよ!！」

銀時の空いている手を掴み、悲痛な声で叫ぶ。
取り乱す白哉を、銀時は呆然と見る。

「……ごめん。さっき、怖い夢見て……」

手を離そうとすると、銀時は白哉の手を握り返す。

「心配すんな。俺は、おまえと一緒にいてやっから」

「銀時……」

銀時を見つめる白哉の目は、どこか潤んでいた。

第18話 波紋

あれから数日が過ぎたある日。
万事屋で、神楽は椅子に座って酢昆布をかじっていた。

「神楽ちゃん……」

部屋の入口で、新八は声を掛けた。
が、返事は無い。

「今日も待ってるの？」

「……うん」

神楽は窓の外をじっと見ている。

「リーダーは、相変わらずか」

「桂さん！」

玄関を開け、桂が入ってきた。
あの後、銀時に頼まれたこともあり、桂と刹那は、2人の様子を見るに、よく万事屋に来る。

「昨日は、刹那が来たらしいな」

「あ、はい。一緒に、依頼を手伝ってくれました」

煉獄姫と呼ばれる攘夷志士だが、刹那の顔は真選組などからは割れていない。

その為、町を堂々と歩いてても平気だった。

「あいつは、俺や高杉と違って、真選組から追い回されていないからな」

「追い回されてないってゆうか、顔を知られてないだけでしょ……」

一息をつき、新八はポツリと言った。

「僕も、神楽ちゃんと一緒に、銀さんが帰って来るのを待ってます」

新八は神楽を見つめる。

「記憶が無くても、銀さんには戻ってきて欲しいです」

「……」

「でも、前みたいに、全部忘れてる訳じゃない。桂さん達のこと覚えているのに、僕達のこと覚えていない……」

新八の声が、少し震えているのに桂は気付く。

「神楽ちゃんはどうか分からないけど、銀さんが桂さん達のことしか分からなかった時、僕達との関係は、こんなものだったのか、って思っちゃったんです」

「新八くん。考え過ぎだ」

「……分かってます。考え過ぎだって。でも、そう思っちゃうんです……！」

バシッ！

後ろから、神楽が新八の頭を叩いた。

「何言ってるアルか、新八！銀ちゃんは、絶対に私達のことを思い出すネ！！おまえは、信じてないアルか！？」

「だけど……」

「銀ちゃんは戻ってくるって、おまえも言ったアル！なんで、信じようとしなないネ！！」

「……」

神楽の言葉に、新八は押し黙る。
すると、玄関の戸が開いた。

第18話 波紋（後書き）

会話……、矛盾してないかな。

第19話 嫉妬（前書き）

展開が早い上に、おかしい所も幾つかあります。
とりあえず、無視して下さい……。

第19話 嫉妬

「あ、バナナ」

「刹那？」

そこには、刹那が立っていた。
が、気まずそうな表情を浮かべている。

「ちょっと…、会話が聞こえちゃったんだけど、いいかな？」

「大丈夫…です」

視線を逸らす新人を一瞥し、刹那は玄関の戸を閉めて言った。

「また、銀時さんと会った海岸に行こうと思うの」

「え……？」

「運が良ければ、また会えるかもしれないし」

「会ってどうする？あいつは、俺達のこととは分かってても、こいつらのことは覚えていないんだぞ」

「それでも…！銀時さんには、戻って来て欲しいの！私達じゃ、銀時さんの代わりになんてなれないから！！」

会話を聞いた為か、語尾が強かった。

「…バニラ、私も行くネ」

「神楽ちゃん……」

「私も、早く銀ちゃんに帰ってきて欲しいネ！一緒に行くアル！」

「新八くんは？」

刹那が訊くと、新八は目を逸らした。

「……そう」

呟くと、刹那は玄関を開け、出て行く。

「新八、おまえは行かないアルか？」

「…さつき、桂さん達のこと覚えている、僕達のこと覚えているって言ったよね」

少し間を開けて、呟くように言う。

「そのことで、嫉妬してたんだ…。僕は……」

「新八…」

「おかしいよね、こんなこと思うなんて」

「おかしくはない。他の者達は覚えているのに、自分達のこと覚えていない。そんなことがあれば、誰でもそんな感情を抱く」

桂がそつと言った。

「ところで、行かないのか？」

「どうするアルか？」

「……僕も、行きます」

口に出していないだけで、桂と神楽も同じ位、色んなことを考えている目をしていた。

自分だけが、そんな思いをしているんじゃない、と新八は改めて思った。

第20話 焦燥

「神楽ちゃん、さっき殴ってくれて、ありがとう」

歩きながら、新八が言った。

「みんな、いろんなことを思っているのに、勝手なこと言っちゃって……」

「なんだ。そのことアルか。私はてっきり、いきなりMになったのかと思ったネ。殴られて、ありがとうなんて言ったから」

「おい！どうゆう意味だそれ！なんで、そんなことを連想したんだ！？」

ぎゃあぎゃあ言い合う新八と神楽を、桂と刹那は、静かに見つめていた。

「また、ここに来てたのか」

浜辺に座って、海を眺めている銀時に白哉が声を掛けた。

「最近、あんまり寝てないだろ？戻って、少し寝たらどうだ？」

「いや、いい……」

軽い頭痛がし、頭を押さえる。

眠っていないのは、頭痛のせいだけではない。

(あの夢のせいか……?)

眠っている時や、ふとした時に、フラッシュバックのように見るものがあつた。

「分かんねエ……」

「何がだ？」

「断片的なモンが、寝てる時や頭痛が起きる時に見えんだ。それが何か、全く分かんねエ……」

白哉は銀時を見つめた。

(これ以上、薬を使うと記憶の混乱が激しくなるか?)

薬の入った瓶を、銀時に見えないよう、そつと握つた。

(でも、記憶が戻るのよりマシか……)

「月が……」

「え？」

「断片的なモンで、よく満月を見る。なんでだろうな」

記憶が戻ることを強く望んでいるが、同時に、このままでいいと思つている自分がある。

何故そう思っているのかも、分からない。

(どじすじゃいいんだ……)

考えていると、遠くから声が聞こえた。

第21話 動揺

「銀さん！」

「銀ちゃん！」

遠くから、新八と神楽、その後ろに桂達が走って来るのが見えた。

「おまえら……」

頭を押さえたまま顔を上げ、銀時は新八達を見る。

「迎えに来たアル」

「一緒に帰りましょう」

「帰れ！！」

白哉は銀時の前に立ち、叫んだ。

「銀時は、おまえらのことなんか知らない！！」

「確かに今、銀時はこいつらのことは分らん。だが、それが帰る理由になる筈はない！」

桂が、一歩前に出て言った。

「……」

再び強い頭痛が起こり、銀時は俯く。

「俺達のことがかかったんだろ！？なら、こいつらのことも思い出せ！！」

「銀時さんはこの子達を、何があっても見捨てたりはしない！この子達の隣にいるのは、私達じゃない。銀時さんなの！！」

高杉と刹那が叫ぶと、銀時は僅かに顔を上げる。

「うっ…あああ……！！」

痛みをこらえながら、高杉と刹那を見た後、目線を新八と神楽にやる。

不安げな表情で、銀時を見つめている。

「銀さん…」

「銀ちゃん…」

「お、俺は…おまえら…と……」

「駄目だっ！！」

記憶を抑え込もうとするかのように、白哉は銀時を強く抱きしめる。

「白哉…、離せ……」

「いやだ。いやだよ、銀時！あいつらのとこになんか行かないで！

「！」

白哉は首を何度も振り、銀時を抱きしめた。
その姿はまるで、小さな子供が駄々をこねているようだった。

(行かないで……)

その言葉が、突き刺さるように響いた。

「ぐっ、ああああっ!!」

白哉を突き飛ばし、銀時は頭を抱えて絶叫した。

「銀時!？」

白哉は新八達を睨み付けた後、銀時に駆け寄る。
銀時は、脱力し、その場に倒れ込んだ。

第22話 真実

「銀時！おい、しっかりしろよ！」

白哉は心配そうに、銀時を揺する。

「銀さん…！」

「おまえらは来るな！！！」

近付こうとする新八と神楽を、白哉は睨み付ける。

その鋭い眼光に、新八と神楽だけでなく、他の3人も怯む。

「うっ…！」

ゆっくりと、銀時が起き上がった。

「銀時…！」

白哉は声を掛けるが、銀時は下を向いている。

しばらくしてから顔を上げ、2人をじっと見つめた。

「新八…、神楽……」

「銀さん……」

「私達のこと…、分かるアルか……？」

「ああ……」

銀時は頷き、微笑んだ。
その様子を見た桂達も、安堵の笑みを浮かべた。

「あ……あ……」

立ち上がり、新八と神楽の所に行こうとする銀時を見て、白哉の目から大粒の涙が溢れる。

「うわあああああつ!!」

泣き叫び、同時に様々な感情が込み上げてくる。

白哉は衝動的に、持っていた薬を銀時に飲ませようとした。

「銀ちゃん!!」

「銀時、危ねエ!!」

「!?!」

銀時は振り返らず、薬を持った白哉の腕をガツ、と掴んだ。

「これで……」

腕を掴んだまま、銀時は肩越しに振り返る。

「また、俺の記憶を消そうとしたのか?白哉……」

白哉を見る銀時の表情に、怒りや憎しみは全く無く、哀しみや寂し

さに近い表情だった。

「銀時……」

顔を背け、白哉は涙を流した。

「またって、どうゆうことですか!？」

「記憶が消えてたのは、そいつが原因だったのか!？」

銀時が言ったことに驚き、新八と高杉が訊いてくる。

「…俺が、夜中に出て行ったのは知ってんだろ?あの夜、白哉は会ってすぐ、俺の記憶を消した」

掴んでいた白哉の腕を離し、見つめた。

「俺と一緒にいる為に……」

第23話 別離

「一緒にいる為…!？」

「何アルか、それ…。一緒にいたいんなら、普通に言えば良かったのに!」

言っている意味が分からず、新八と神楽がそれぞれ言う。

「…そう言いたくなるのは分かる。けどな、白哉には、そうゆう選択肢がなかったんだよ」

銀時は、砂浜に座り込んだ白哉を見下ろす。

白哉はまだ、すすり泣いている。

「選択肢がなかったとは、どうゆうことだ？」

桂が訊いてくる。

銀時は一度、頭に手をやり、言葉を選んだ。

「銀ちゃん、まだ頭痛いアルか？」

「いや、そうじゃねエ。…話すとなると、ちょっと長くなると思うてな」

息をつき、銀時は話し出す。

どこか、つらそうな目をしながら。

白哉と出会って、3年経った。
2人は、木の実や魚をとったり、戦場の死体を漁ったりしながら、生活していた。

「最近、食べる物が少ないな……」

「うん。でも、我慢出来るよ、俺は」

年下である白哉に、銀時はなるべく食べ物も多くあげている。

「また、なんか探してくる」

「俺も行く!」

食べ物を探しに行く時も、白哉は何時でもついて行った。

「どっかに、いいモンねエかな……」

銀時が辺りを見ながら歩いていると、道行く者達は、銀時を異様な目で見た。

「鬼だ!」

「化け物だ!」

口々に言う者達に、白哉は叫ぶ。

「銀時は鬼でも、化け物でもない! れっきとした人間だ!」

「白哉、いい。行くぞ」

白哉の手を引き、銀時は足早に歩く。

「でも…！」

「鬼だの化け物だの、言われ慣れてる」

普通の人と異なる、髪と瞳の色。

白哉と出会う、いや物心が付いた頃から言われ続けた言葉だった…。

「俺は…！」

銀時の手を振り払い、白哉は少し下を向く。

「鬼とか、化け物とかだなんて思ってない。銀時は人間だって思ってる！」

顔を上げ、銀時を見据えた。

それを見て、銀時は少し嬉しく思った。
その時。

「あつちに鬼がいるぞ！」

「殺せ…！」

遠くから、武器を持った大人が何人が走って来るのが見えた。

「白哉、逃げるぞ！」

「うん！」

夕暮れの道を、2人は走って逃げた。だが、逃げても逃げても、大人達は追うのを止めない。

「しつこいな……」

日は沈み、白く光る満月が見える。

こんな状況でも、綺麗だな、と思った。

「うわっ！」

遂に追いつかれ、白哉が捕まる。

「白哉！」

「捕まえたぞ、化け物め！！」

白哉を助けようとする銀時を、男が引き戻す。

「離せ！！」

「鬼を殺せ！！」

「化け物は、いなくなれ！！」

暴れる銀時に、男達は言う。

「止める！銀時は、人間だ！鬼でも化け物でもない！！」

白哉は必死で叫ぶが、誰も聞こうとしない。

「この先の崖に、こいつを突き落とそう！」

「あそこは、深い谷だ。落ちれば、確実に死ぬ！」

そう言うと、何人かの男達は銀時を連れて行く。

「銀時！」

「白哉……!!」

押さえつけられている為、白哉は追うことが出来ない。

「離せ！銀時が……!!」

「あんな化け物といれば、おまえも不幸になるぞ！」

白哉を押さえつけている男が言った。

「不幸……」

（何が不幸だ。銀時は俺にとって……）

その思いが頭をよぎった時、白哉は男に噛み付き、近くにあった石で殴りつけた。

「銀時は、俺の家族だ！不幸になる筈が無い!!」

銀時が連れて行かれた方向に、急いで走る。

「どこだ!?!」

目を凝らし、耳をすませる。

物音が聞こえ、茂みを掻き分けていくと、銀時を谷底に突き落とそうとする男達を見つけた。

「銀時!」

「白哉っ、来るな!!!」

白哉の身を案じ、銀時は叫んだ。

「銀時から離れる!!!」

石を幾つか投げ、男達が少し怯む。その隙に、銀時の近くに行く。

「白哉!」

「大丈夫?」

「白哉、後ろ…!!」

「このガキ…!!」

男の1人が、白哉を強く蹴った。

「止める、白哉は関係無いだろ!」

「うるせエー!!」

別の男に突き飛ばされ、銀時は崖っぷちに転がった。

「死ねエ、化け物!!」

「銀時…！行かないで!!」

白哉は、銀時を庇うように、男の間に入る。

その直後に、白哉は男に突き落とされ、谷底に消えた。

「白哉…？え、白哉ーッ!!」

銀時は追い掛けるように、谷底に身を投げる。

「うわっ!!」

落ちた先は激流だった。

泳げない銀時は、流されながらも、白哉を捜した。

「白哉、ごぼっ！どこだ…!!」

暗い谷底を流され、泣きながら叫ぶ。

「どこ…だよ…!!」

不意に、水中に沈んだ。

何も見えず、自分1人しかない。

(いない。どこにも……)

そう感じた瞬間に、様々な感情が溢れかえった。

(俺は、1人になってしまった……)

「うわああああっつー!」

叫ぶのと同時に、銀時は滝に流され、そのまま落下してしまう。

第24話 心境（前書き）

BLっぽいかもしれませんが、どちらかと言うとフヲコンみたいな感じですよ。

第24話 心境

「……それから、俺はずっと流された。その後、流れ着いた場所で目を覚ました俺は、白哉のことを……」

銀時は、白哉に視線を落とす。
すすり泣いていた白哉は、顔を上げた。

「おまえのことを……ずっと忘れてた」

「立て続けに、ショックなことが起きたんだ。恐らく、自分の精神を守ろうとした為に、こやつ記憶が消え去ってしまったんだろう」

桂は、話しながら白哉を見た。

「俺……落ちて離れ離れになった後、ずっと1人で生きてきた。銀時を捜しながら……」

白哉は、呟くように言った。

たった1人、銀時と再び会えることを信じて生きてきた。

「それから何年も経って、銀時の居場所が分かった。だから、俺は銀時に会おうとした……」

万事屋を尋ねた白哉だったが、留守なのか誰もいなかった。
仕方なしに、別の日に来ようと思った時だった。

「あ……！」

正面から、銀時が歩いて来るのが見えた。
昔の面影があつた為、すぐに銀時だと分かった。

「銀時っ！」

白哉は走り、銀時の前に行く。

「あの……」

「……誰？おまえ」

銀時は、白哉を怪訝そうに見た。

「え……」

「用もねーのに、声掛けんなよ」

そう言うと、銀時は去って行った。

「銀時……俺のこと、忘れちゃったの……？」

成長したから、分からなかったのかもしれない。
だが、銀時が自分に向けた目は、他人を見る目だった……。

「どっつして……？」

一緒にいたのに。
家族だったのに。

どうして、分からないの……。
そんな想いが溢れた。

「次の日に、俺は銀時に手紙を書いて、夜中に呼び出した。でも、銀時はやっぱり俺のことを忘れて」

「忘れてねーよ」

「え？」

その一言に、白哉だけでなく、他の者達も銀時を見る。

「確かに、最初に会った時は、おまえのこと忘れてた。でも、あの後……」

万事屋に戻った銀時は、ジャンプを読みながら寝てしまい、その時に夢を見た。

(ん……)

道端で倒れている、黒髪の少年。
だが、顔がよく見えない。

(誰だ……?)

自分と一緒に食べ物を分け、笑いあっている。

『名前、まだ言ってなかったね』

少年の声が聞こえた。

同時に、ドクンと胸が高鳴った。

(俺は…こいつを知ってる……)

『俺は……』

銀時は目を見開き、ガバツと起き上がった。

「白哉……」

今まで、ずっと忘れていた。

月原白哉とゆう、自分にとって、大切だった者の記憶が一気に甦った。

「生きてたんだな、白哉……」

安堵と同時に、白哉を誰、と言ってしまった自分を責めた。

「おまえの手紙を貰って、ちゃんと話そうと思った。けど、会ってすぐに」

「俺のこと…、分かったの……?」

「ああ……」

思わず、警戒して言った一言。

その直接に、月光に照らされた顔。

紛れも無く白哉だった。

「分かってたんだ……」

白哉の目から、涙が流れた。

「ごめん……、話しも聞かないで、あんなことして……」

銀時は、白哉を抱き寄せた。

「もういいんだよ……」

静かに呟き、白哉は泣き続けた。

夕闇の訪れた空に、白く光る満月が輝き始めていた。

第25話 月光（前書き）

白哉の年齢は、銀時より3つ年下と設定していました。
今更、遅いか……。

第25話 月光

あれから、1週間が経った、ある夜。

「新八イ、おかわり」

「俺も」

「……」

3人は、揃って茶碗を新八に差し出す。

「3人同時に受け取れるかアツ!!」

そう言いながら、神楽の茶碗を先に受け取り、ご飯を盛った。

「てゆうか、月原さん！黙って茶碗差し出すの止めてくれませんか！？」

あの後、銀時は白哉に「一緒に来るか？」と訊いた。

白哉は驚いていたが、すぐに頷いた。

で、今に至る。

「おい、白哉。盛ってもらったんだから、礼言え。『ダメガネありがとつ』『とつ』」

「ダメガネありがとつ」

「何教えてんだ！つーか、あんたも言われた通りにすんな！」
これまで、ずっと1人で生きてきたせいかな、白哉は銀時にしか、心を開いていない。

「銀時、匿ってくれ！」

突然、桂が入って来る。

真選組に追われているのだろう。

「銀時、ツラが来た」

「追い出しとけ」

「ちょっと待て！いきなり、それはないだろう！？…それより、ツラじゃない桂だ！！白哉、ちゃんと名前で呼べ！」

「ツラって呼べって、銀時が言ってた。だから俺も、ツラって呼ぶ」

「貴様……！！」

「あれ？小太郎さんも来てたの？」

玄関の戸を開け、刹那が入って来た。

「及川さん！」

「チビ杉は一緒じゃないのか？」

新八が声を掛けると、白哉も声を掛けた。

「白哉くん、銀時さんが言ったこと、真に受けなくていいんだよ」

「ちょっとは、慣れてきたみたいだなア……」

刹那の後ろには、青筋を立てた高杉がいた。

「銀時イ、そいつに余計なこと教えてんじゃねエよ……！」

「余計じゃねエ。事実だろ？」

「てめエツ……！」

飛びかかろうとする高杉を、刹那が止める。

その様子を見ていて、自然と笑みがこぼれた。

「あれ、白哉も笑ってる」

ここに来て、白哉が笑っているのを見たのは初めてだった。

（慣れてきたんだな、おまえ……）

窓から空を見ると、月が見えた。

降り注ぐ月光は、淡く、とても優しくかった。

完

第25話 月光（後書き）

ご愛読、ありがとうございました！
次回も、よろしく願いします！！
多分……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6766r/>

月の残像

2011年5月20日13時23分発行